倫理プリント

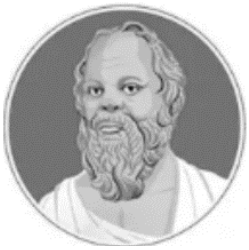
ソクラテス 知の探究者

（ｉ）無知の自覚

ソフィストたちによって失われた道徳意識を克服し、アテネの正義と秩序を求めた人物こそが、今回紹介するソクラテスである。「哲学の父」や「哲学の祖」と呼ばれるほど、哲学界では王道中の王道となる人物である。

ソクラテス ▌ギリシャ (前470?-399)?

「私は知らないことを
知らないと思っている」



・著書：残っていない(弟子のプラトンが著した『ソクラテスの弁明』『クリトン』などが根拠)
・妻は悪妻として名高いクサンチッペ(世界三大悪妻の１人)
・アテネに出向いてはソフィストの無知を暴き、人間の真に善い生き方を説いた。
・70 歳の時に「青年たちを惑わす罪」で告訴され死刑に。彼の思想は弟子たちによって発展した。

■ 哲学的活動のきっかけ

アポロン神殿にて、神からのお告げを受ける＝[1　　] **“ソクラテス以上に知恵のあるものはいない”**

私は無知であるのに、どういうことなのだろう…？
自分より賢い人を見つけ出して、神のお告げに反論してやろう！ → 賢者と評判の人々を訪ねることに

★ [2　　] …賢者に対して物事の本質を問う対話を繰り返し、知の探究を目指した。

この問答法を繰り返すうちにソクラテスはあることに気づくことになる。
互いに物事の本質を解き明かせないが、自称賢者たちは「自分は知っている」と思い込んでいる。
無知であることを自覚していないことが問題だと悟った。

★ [3　　] …自分が知らないということを自覚している者こそが、本当に賢い。

自分は何もわかっていない…という自覚が、探究に対する情熱を呼び起こす。
これが学びの出発点であり、自覚できない者は成長できないということ。

それからソクラテスは、対話を通して相手の無知を自覚させることに奔走する。デルフォイのアポロン神殿にあった「4　　」という標語を、「自らの無知を自覚せよ」と解釈し、彼の座右の銘とした。
対話を通して相手を真の探究へ誘う手助けをしたことから、問答法は[5　　]とも呼ばれる。

出展 『ソクラテスの思い出』（クセノフォン）

老人が、アテネの広場で、一人の青年をつかまえて次のような対話をしています。
「嘘をつくことは正か不正か？」　「そりゃあ不正に決まっています」
「では、ある将軍が軍隊の士気が落ちているのを見て、“援軍が来るぞ”と嘘を言うのは不正かね？」　「それは不正と言えないでしょうね」
「では、ある母が息子が病気で薬を飲むのを嫌がっているとき、“これは食べ物だよ”と嘘を言って飲ませるのは？」　「それも不正と言えないです」
「なんだね、嘘をつくことは不正であり、不正でないことになるじゃないか。はっきりしてほしいね」　「もう私には分からなくなってきました…」
「よろしい。君は今まで嘘をつくことは正か不正か知らなかったくせに、知っていると思い込んでいたんだね。」　「その通りです」
この老人こそ、一部のものから「アテネという馬にたかる、うるさいアブ」と忌み嫌われ、そしてほかの一部のものからは「人間において最も善く、最も正義感が強く、真の意味で最も勇敢な人間」としてほめたたえられている、ソクラテスであったのです。

（ⅱ）対話のテーマ　～徳とは何か～

ソクラテスが突き詰めたテーマの一つが、人間にとって重要な「真の知とは何か」ということ。

■ [6　　] …あらゆるものがもつ、それぞれの固有の役割のようなもの

では人間のアレテーは…？　→　「[7　　]を求めて生きること」

ex 靴のアレテー …
包丁のアレテー …

■ 「徳」を得るための生き方

・魂(＝[8　　])への[9　　]を忘れないこと ◂ **不善・不正を行えば自分の魂を傷つけることになる**

★[10　　] … 「善いこと」「価値あること」について**根本的な知を身につけること**で、自然とその**徳が備わる**

★[11　　] … この**正しい知識**は実践に向かい、**現実の良い行為**へと繋がる

★[12　　] … **徳を身につける**ことが「よく生きる」ことであって、同時に幸せな生き方である

「大切にしなければならないのは、[13　　]のではなく[14　　]ことなのだ」（ソクラテスの言葉『クリトン』より）

（ⅲ）ソクラテスの死

相手の無知を暴く問答法は、当時の人々への厳しい批判などから、敵が多かったソクラテス。
その敵の一部であるアテネの支配層が、「ソクラテスは青年たちを惑わし国家公認の神々を認めなかった」というでたらめな罪でソクラテスを告発し、死刑判決を受ける。この時、死刑執行までかなりの猶予が与えられ、いつでも逃げられる状況であった。命の危機に怯え無様に逃げる姿を、見せしめにしたかったのだろうと言われている。
また、不当な判決として仲間たちも国外逃亡を促していたが、結局ソクラテスは聞き入れなかった。
そして執行の日。ソクラテスは「[15　　]」という言葉を残し、毒杯をあおいだ。

Think　なぜソクラテスは逃げることをせずに死刑を受け入れたのだろうか？

自分の考え

他者の考え

共テチャレンジ！　**よき生き方を追求したソクラテスは、自らに下された死刑判決を不当としながらも，脱獄の勧めを拒み，国家の法に従って刑を受け入れた。彼の考えとして最も適当なものを，次の①～④のうちから一つ選べ。【2016 年本試】**

① 国家は，理性に従って人々が相互に結んだ社会契約のうえに成立している。それゆえ，国家の不当な決定にも従うことが市民のよき生き方である。
② たとえ判決が不当であるとしても，脱獄して国家に対し不正を働いてはならない。不正は，それをなす者自身にとって例外なく悪だからである。
③ 脱獄して不正な者と国家にみなされれば，ただ生きても，よく生きることはできない。人々に正しいと思われることが正義であり，善だからである。
④ 悪いことだと知りつつ脱獄するのは，国家に害をなす行為である。だが，人間の幸福にとって最も重要なのは，国家に配慮して生きることである。

[　　]年[　　]組[　　]番　名前

倫理プリント

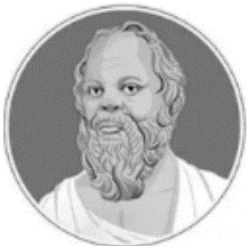
ソクラテス 知の探究者

（ｉ）無知の自覚

ソフィストたちによって失われた道徳意識を克服し、アテネの正義と秩序を求めた人物こそが、今回紹介するソクラテスである。「哲学の父」や「哲学の祖」と呼ばれるほど、哲学界では王道中の王道となる人物である。

ソクラテス ▌ギリシャ (前470?-399)?

「私は知らないことを
知らないと思っている」



・著書：残っていない(弟子のプラトンが著した『ソクラテスの弁明』『クリトン』などが根拠)
・妻は悪妻として名高いクサンチッペ(世界三大悪妻の１人)
・アテネに出向いてはソフィストの無知を暴き、人間の真に善い生き方を説いた。
・70 歳の時に「青年たちを惑わす罪」で告訴され死刑に。彼の思想は弟子たちによって発展した。

■ 哲学的活動のきっかけ

アポロン神殿にて、神からのお告げを受ける＝[1 **デルフォイの神託**] **“ソクラテス以上に知恵のあるものはいない”**

私は無知であるのに、どういうことなのだろう…？
自分より賢い人を見つけ出して、神のお告げに反論してやろう！ → 賢者と評判の人々を訪ねることに

★ [2 **問答法**] …賢者に対して物事の本質を問う対話を繰り返し、知の探究を目指した。

この問答法を繰り返すうちにソクラテスはあることに気づくことになる。
互いに物事の本質を解き明かせないが、自称賢者たちは「自分は知っている」と思い込んでいる。
無知であることを自覚していないことが問題だと悟った。

★ [3 **無知の知**] …自分が知らないということを自覚している者こそが、本当に賢い。

自分は何もわかっていない…という自覚が、探究に対する情熱を呼び起こす。
これが学びの出発点であり、自覚できない者は成長できないということ。

それからソクラテスは、対話を通して相手の無知を自覚させることに奔走する。デルフォイのアポロン神殿にあった「4 **汝自身を知れ** 」という標語を、「自らの無知を自覚せよ」と解釈し、彼の座右の銘とした。
対話を通して相手を真の探究へ誘う手助けをしたことから、問答法は[5 **助産術**]とも呼ばれる。

出展 『ソクラテスの思い出』（クセノフォン）

老人が、アテネの広場で、一人の青年をつかまえて次のような対話をしています。
「嘘をつくことは正か不正か？」 「そりゃあ不正に決まっています」
「では、ある将軍が軍隊の士気が落ちているのを見て、“援軍が来るぞ”と嘘を言うのは不正かね？」 「それは不正と言えないでしょうね」
「では、ある母が息子が病気で薬を飲むのを嫌がっているとき、“これは食べ物だよ”と嘘を言って飲ませるのは？」 「それも不正と言えないです」
「なんだね、嘘をつくことは不正であり、不正でないことになるじゃないか。はっきりしてほしいね」 「もう私には分からなくなってきました…」
「よろしい。君は今まで嘘をつくことは正か不正か知らなかったくせに、知っていると思い込んでいたんだね。」 「その通りです」
この老人こそ、一部のものから「アテネという馬にたかる、うるさいアブ」と忌み嫌われ、そしてほかの一部のものからは「人間において最も善く、最も正義感が強く、真の意味で最も勇敢な人間」としてほめたたえられている、ソクラテスであったのです。

（ⅱ）対話のテーマ　～徳とは何か～

ソクラテスが突き詰めたテーマの一つが、人間にとって重要な「真の知とは何か」ということ。

■ [6　**アレテー**　] …あらゆるものがもつ、それぞれの固有の役割のようなもの

では人間のアレテーは…？　→　「[7　**徳**　]を求めて生きること」

ex 靴のアレテー … **履けること**
包丁のアレテー … **よく切れること**

■ 「徳」を得るための生き方

・魂(＝[8　**プシュケー**　])への[9　**配慮**　]を忘れないこと ◂ **不善・不正を行えば自分の魂を傷つけることになる**

★[10　**知徳合一**　] … 「善いこと」「価値あること」について**根本的な知を身につけること**で、自然とその**徳が備わる**

★[11　**知行合一**　] … この**正しい知識**は実践に向かい、**現実の良い行為**へと繋がる

★[12　**福徳一致**　] … **徳を身につける**ことが「よく生きる」ことであって、同時に幸せな生き方である

「大切にしなければならないのは、[13　ただ生きる　]のではなく[14　善く生きる　]ことなのだ」（ソクラテスの言葉『クリトン』より）

（ⅲ）ソクラテスの死

相手の無知を暴く問答法は、当時の人々への厳しい批判などから、敵が多かったソクラテス。
その敵の一部であるアテネの支配層が、「ソクラテスは青年たちを惑わし国家公認の神々を認めなかった」というでたらめな罪でソクラテスを告発し、死刑判決を受ける。この時、死刑執行までかなりの猶予が与えられ、いつでも逃げられる状況であった。命の危機に怯え無様に逃げる姿を、見せしめにしたかったのだろうと言われている。
また、不当な判決として仲間たちも国外逃亡を促していたが、結局ソクラテスは聞き入れなかった。
そして執行の日。ソクラテスは「[15　**悪法も法なり**　]」という言葉を残し、毒杯をあおいだ。

Think　なぜソクラテスは逃げることをせずに死刑を受け入れたのだろうか？

自分の考え
・有罪判決で脱獄するということは、正義に反する行為であるから

他者の考え
・命が危ないからといって、自分の信じた“善いこと”を撤回することは、自分のポリシーに反するから
・状況によって自分の主張を変えるのは相対主義の考え方であるから。

共テチャレンジ！　**よき生き方を追求したソクラテスは、自らに下された死刑判決を不当としながらも，脱獄の勧めを拒み，国家の法に従って刑を受け入れた。彼の考えとして最も適当なものを，次の①～④のうちから一つ選べ。【2016 年本試】**

① 国家は，理性に従って人々が相互に結んだ社会契約のうえに成立している。それゆえ，国家の不当な決定にも従うことが市民のよき生き方である。
② たとえ判決が不当であるとしても，脱獄して国家に対し不正を働いてはならない。不正は，それをなす者自身にとって例外なく悪だからである。
③ 脱獄して不正な者と国家にみなされれば，ただ生きても，よく生きることはできない。人々に正しいと思われることが正義であり，善だからである。
④ 悪いことだと知りつつ脱獄するのは，国家に害をなす行為である。だが，人間の幸福にとって最も重要なのは，国家に配慮して生きることである。

[　　]年[　　]組[　　]番　名前